

NEWSLETTER

特別号

SPECIAL ISSUE

What's
New

平成28年4月1日新執行部スタート

第3期ビジョン

光で「視る、診る、看る」を極め、日本・世界の医療を牽引する



透明性・公平性のある運営で 新たな浜松医科大学を創ります

学長

今野 弘之

はじめに

国立大学法人浜松医科大学7代学長を拝命した今野弘之です。宜しくお願いします。初代学長吉利和先生以来、人格識見ともに卓越した歴代の先生方に連なることの戸惑いとともに、職責の重さに身の震える思いです。

さて、国立大学法人としては寺尾俊彦学長、中村達学長に続いて3代目となります。任期は原則6年ですので、第3期中期目標期間と全く同一期間を担当することになります。法人化の黎明期から現在までを振り返るとともに、これからの運営方針を述べさせていただきます。

法人化後の概観

寺尾先生は法人化4年前の平成12年に学長に就任され、法人化の準備から立ち上げ、さらに第1期中期目標期間まで、10年間本学の舵を取られました。政治主導の教育改革の掛け声のもとに、平成16年度より国立大学法人として新たな大学運営が開始されました。教育研究評議会の設置に伴い、教授会で行う審議内容が大きく変更され、新たに初期研修制度も開始されました。大変革の中で、多くの国立大学は受動的な対応にならざるを得ず、大学での研修医の激減に加え、臨床講座では入局者の減少により関連病院の維持が困難となり、基礎医学講座では状況はさらに危機的でした。また、DPCが導入され、これまでの「出来高払い」時代とは全く異なる病院経営が求められました。まさに激動の時代で、大学によっては教授会の激しい反発もあったようですが、本学は比較的スムーズに移行できました。

寺尾先生を引き継がれた中村学長は、病院担当と財務担当理事を6年間兼務された後、6年間学長として本学の指揮をとられ、本学の健全な経営の礎を築られました。さらに、国の第2期中期目標である「法人化の長所を生かした改革を本格化」を推進され、後期には本学の強みを生かした「ミッションの再定義」が行われました。病院再整備も平成25年に終了し、研究棟、講義実習棟、図書館、学生の福利施設や、産学共同研究のための大型機器室、最先端の研究機器も整備するとともに組織再編も行われ、グローバル化、イノベーションの体制の構築、そしてガバナンスの強化により、光医学関連の先端的研究を中心とした研究成果が世界に発信できる体制を造られました。

法人化以降の本学の運営を概観すると、他の国立医科大学でみられた大学同士の合併には組せず医科大学として存続する道を選択し、健全な財政を堅持しながら、光医学を中心とした研究に集中的に資源を投入することで本学の独自性を担保し、地域企業を中心に産学連携を展開してきました。高い国家試験合格率を維持しながら、県内出身者を増加させ、地域の医療に貢献する優れた医師を養成してきました。

これからの浜松医科大学の運営

さて、このような法人化後の歩みを経て、今年度から第3期中期目標期間を迎えます。まず初めに申し上げたいことは、建学の理念、「優れた医療人や独創力に富む研究者を育成するとともに、地域医療の中核的役割を担い、人類の

執行部役員紹介



理事(教育・産学連携担当)・副学長

山本 清二

本年4月より、理事(教育・産学連携担当)・副学長を仰せつかりました山本清二です。

私は和歌山市の生まれですが、小学校は大阪府八尾市、中学校は東京都中野区、高校は千葉市、その後実家は奈良市と、父親は転勤族で引っ越しを繰り返しました。おかげで見知らぬ人との出会いは楽しく、出張であちこちに行くことは苦にならないどころか、やはり楽しくてしょうがありません。

私は本学の第1期生で、脳神経外科に入局後、10年間は臨床に明け暮れる毎日でしたが、平成3年から2年間、米国コーネル大学医学部へ留学して研究にも興味を持ち、本学脳神経外科で臨床と研究の両方に関わりました。平成12年からは本学光量子医学研究センターで光を使ったイメージング研究に従事し、多くの工学系大学や企業の人たちとの交流の中で、光学・工学の知識と経験を得ることができました。市中病院と大学病院での勤務医の経験、研究者の経験、多くの異分野の人たちとの交流が、これまで私が取り組んできた産学連携による医療機器開発やコミュニケーション教育を支える大きな力になっていると信じています。

次は理事として教育改革を担当するわけですが、新カリキュラム、入試改革、分野別認証評価、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー作成などなど…、課題が山積みで多岐にわたり、これはとても一人で何とかなるものではありません。宮嶋裕明副学長(教育改革担当)、梅村和夫学長特別補佐(カリキュラム担当)と一緒にみんなで力を合わせて頑張っていくつもりです。多くの教員や事務局のみなさんに支えていただかないと仕事できません。その中で責任を持って取りまとめをすることが私の仕事だと思っています。何卒よろしくお願いします。



理事(企画・評価担当)・副学長

金山 尚裕

本年4月より理事(企画・評価)・副学長を拝命いたしました。私は本学の1期生です。今回理事に就任した山本清二先生とは陸上部の同僚です。平成11年より産婦人科教室を主宰して参りましたが、この間産婦人科は激動の時代でした。平成16年の新臨床研修制度開始と大野病院事件で全国の産婦人科医師は大きく減少し、各地で分娩閉鎖施設が続発し、産科医療崩壊の危機が発生しました。静岡でも同様に多くの分娩施設が休止に追い込まれました。その後徐々に復活し現在に至っていますが、この過程で個人的には様々な繋がりが行政、医師会、地域の病院との間にできました。これらの縁により当大学に寄附講座の産婦人科家庭医療学講座、地域周産期医療学講座、臨床医学教育学講座が創設されました。長年産婦人科医療に従事してきて女性医師の活躍、女性医師のキャリア形成の重要性が痛感されましたので、一昨学年内に県内初の女性医師支援センターを設立しました。次期中期目標の中で企画・評価では業務運営の改善、財務内容強化、評価の充実、社会貢献・地域連携等が大きな柱となっていると認識しています。産婦人科教授として培ってきた様々なパイプを使い第3次次期中期目標の確実な実現を目指したいと思います。自画自賛になりますが、過去5年間の科研の獲得額(産婦人科領域)において浜松医科大学産婦人科は旧帝大を抜き全国トップクラスです。組織の発展のためには常に新しい企画に挑戦することが肝要です。新しい企画を成功させることは私の得意とするところですので、今後大学の運営にも役立てられればと考えています。

組織を活性化、円滑化するためにはまずは役員間、各部署の職員の方々と常に風通しをよくすることが肝要でそれに心がける所存です。今野学長と同様、創立期より大学に勤務していますので浜松医科大学の長所、短所は認識しているつもりです。今野学長の方針に沿って業務を遂行し、責務を全うする所存です。皆様のご協力よろしくお願いします。

福祉に貢献する」は、当然のことながら全く変わりません。一方、今回の学長選考会議では、開学以来初めて候補者によるプレゼンテーションが行われましたが、私は「常に変化するという認識が重要である」ことを強調しました。建学の理念を実現するためには、時代の変化をいち早く捉え、柔軟にかつ的確に対応する必要があります。「ミッションの再定義」では、本学は地域医療への貢献を明確にしましたが、一歩進めて地域特性でもある「健康長寿社会の実現」を目標として掲げたいと思います。法人化以降、良くも悪くも学長によるガバナンスの強化がいられていますが、残念ながら裁量の範囲は限定的であり、大学独自に事業を展開できる状況にはありません。法人化によって規制が緩和され、自主性が大幅に拡大することが期待されましたが、国立大学法人という外形上、私学のように自由に資金を運用し、独自の将来構想に基づいた戦略的な施策を進められるわけではなく、国の定める中期目標に沿った運営が求められます。このように極めて限定的な「強化された学長のガバナンス」の中で、本学の特徴を示すためには、限定的な自由度を最大化し、人的、財政的資源の集中的投入や新規事業の開拓、職場環境の改善、男女共同参画の促進等を確実に実践することが必要です。端的に言えば、極めて厳しい環境の中で困難な仕事を成就することが求められており、もとより皆様の協力なくしては何も実現しないことは論を俟ちません。

大学運営において最も重要なのは人材ですが、本学は幸いなことに、教育、研究、診療、そしてこれから必須となる国際性、産学連携、医療安全、感染対策等に、極めて熱心で真摯に仕事に取り組む多くの職員を有しており、十分な人的資産を有しています。一方で、財政的資源は不十分で、前執行部から「第3期は本当に大変だ」と繰り返し財政面での困難さを申し送られており、第3期で危機的状況に陥る可能性は排除できません。財政健全化のため、病院収入、競争的資金のみならず寄付金等による

財政的基盤の構築に全学で取り組む必要があります。

教育では、入学者選抜試験から学業成績、共用試験、国家試験、さらには卒後のキャリアパスまで全体を検証し、カリキュラムの評価・改善に生かすために新たなシステムを導入します。第3期中期目標期間において、大学入試が知識の記憶力の評価から知力を評価する「ゼロ型」に大変革します。大学教育においてもこれに基づいた改革が必要です。ディプロマポリシーの改訂は昨年度末に完成しました。これはまさに本学の教育指針の根幹をなすものであり、今後はカリキュラムポリシーの改訂とともに、国際認証カリキュラムを具体化し実施する必要があります。さらに、新たなガイドラインに基づいたアドミッションポリシーを作成し、3つのポリシーを一体として教育体制のバックボーンとしていきたいと考えています。高校生や社会に向かって本学のアドミッションポリシーを示すことで全国から優秀な学生を集め、高度な知識と技術を身に付けた人間的にも優しく、豊かな教養を持つ医療人を養成していきます。さらに、学生の英語力の向上、海外への留学を促進する一方で、海外から若い人材に来てもらう必要もあります。海外からの人材との交流を日常化することで、学生や若手医療人の国際感覚の涵養や、文化の多様性の理解を深めたいと考えています。

研究では「光先端医学教育研究センター」が中心となり、本学の強みである光医学を応用した産学官連携の研究を進展します。一方で、新たな研究シーズ探索を目的として、独創的、先進的、国際的研究を推進する必要があります。このためには、施設、人員の充実が必要ですが、第2期において、研究棟の整備や最新の機器の整備を積極的に行っていただいたお蔭で、その環境は良好です。常に新たな研究シーズを発掘しようとする努力が継続できるように支援します。すでに世界に発信できる新たなテーマも見出されており、積極的に支援し、これらの研究成果を基に競争的資金、寄付金の獲得にも努めます。グローバル

化は教育のみならず、研究においても必要条件であり、研究の活性化、新たな研究のシーズ探求への貢献も期待できます。

診療については、病院長として2年間病院の運営を担当してまいりましたが、本学附属病院は病院職員の努力のお蔭で極めて良好な運営状態にあります。高度な医療を安全に提供し、行政、地元医師会、関係病院と密接に連携しながら、地域医療の再構築や専門医制度の中心的存在として、地域医療に積極的に貢献します。専門・認定看護師を増加させ、高度な医療に対応する看護体制を支援するとともに、本学で資格認定できるような体制を構築します。新専門医制度に対しても「卒後教育センター」を設置し、早くから各科の協力を得ることで研修医と専攻医を一体として支援し、本学に所属する医療人を増やします。健全経営も極めて重要であり、我々医科大学にとって病院収益は本学の収入の根幹となります。総合大学のように病院が赤字を出しても大学本部が支援してくれるような有難い話はありません。大学と病院の敷居を低くし、連携して健全経営が行える環境を継続して創り上げていく必要があります。

稿を終えるにあたり

教育、研究、診療が三位一体となり、それぞれが高めあい、深化してゆくことにより、初めて目標として掲げた「健康長寿社会の実現」が成就できるものと思います。まさに「以て人類の健康と福祉に貢献する」という建学の理念が具現化することになります。もちろん道は険しく前途多難です。安易な手段を選ばず、一步一步着実に前進することが肝要だと思います。医療は現代社会の基盤であり、職員一人一人が自らの職責を果たすことにより、本学は高いpotentialを発揮できます。各々が本学の将来構想を共有し、自らのキャリアパスを積み重ねていく中で、熱意と真摯さを結集し、世界に冠たる浜松医科大学を創り上げようではありませんか。皆様のご協力とご支援を心からお願い申し上げます。

浜松医科大学は平成28年4月から今野弘之新学長以下

理事4名、監事2名、副学長4名、学長特別補佐2名による新しい体制がスタートしました。

選任された役員等は各担当の責任者として、積極的な活動に取り組んでまいります。



理事(財務担当)

前田 広

平成28年4月1日付けで再度理事・事務局長を拝命し、今野学長の下で引き続き財務を担当することとなりました。これまで2年間の経験を踏まえ、本学のさらなる発展のために全力を尽くしてまいりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

平成16年に国立大学が法人化して、今年度から第3期中期目標・中期計画期間のスタートとなります。

国の財政状況が厳しい中、国立大学には社会からの様々な要請に応えられるよう国立大学の改革を求める動きが加速しています。特に財政面では財務基盤の強化という観点から、自己収入の拡大を求められています。したがって本学では、病院収入や研究資金を安定的に確保することはもちろんのこと、今期から学生の奨学金や教育、研究設備等の充実を図るため基金を創設することとしています。準備ができ次第改めてご案内申し上げますので、趣旨に賛同の上ご協力方よろしくお願いいたします。

また、大学の教育、研究機能の強化には、事務職員の高度化が重要と考えております。業務が高度化、多様化する中、限られた人員で柔軟に対応できるよう職員の意識向上を図り、また、SD、OJT等による質の向上に努めます。さらに、事務処理の効率化・合理化を進めるとともに、学内に蓄積されている豊富なデータを活用して経営的観点から業務を行うシステムを構築したいと考えています。

財政状況の悪化と人口減少の中、大学経営も厳しさを増していますが、教育研究、診療、職場の環境の充実、改善に努めてまいりますので、皆様方のご指導、ご鞭撻を重ねてお願い申し上げます。



理事(経営担当)

晝馬 明

今野新学長より、引き続き理事の職を仰せつかった浜松ホトニクスの晝馬明です。

アメリカン会社から帰ってきて当社の社長に就任(2009年12月)してすぐに故寺尾元学長と中村前学長が本社においでくださり、私に本学の理事への就任を打診された際の驚きと戸惑いを今も覚えております。(2010<平成22>年4月1日就任)

それから6年の歳月が過ぎました。「そのあいだにお前は浜松医科大学の発展の為何をやったのだ」と自責の念にかられるばかりです。

この間に世の中では大きな変化がありました。まず突出して挙げられるのが2011年の東日本大震災。これは日本、そして世界を変えてしまった悲劇であり、その復興支援の為に活動された方は本学にも多数いらっしゃると思います。

年代順に振り返ってみましょう。【2010年】サッカーワールドカップ南アフリカ大会／はやぶさ帰還／アラブの春／ギリシャ財政危機 【2011年】東日本大震災 【2012年】CERNでヒッグス粒子発見／第2次安倍内閣発足 【2014年】マレーシア航空機が消息を絶つ(3月)／サッカーブラジルワールドカップ(6月)／浜松出身の天野先生を含めた日本人3名ノーベル賞受賞(12月) 【2015年】キューバとアメリカ国交回復(7月)／ラグビーワールドカップで日本大健闘(9-10月)／大村先生、梶田先生、ノーベル賞受賞

このように、大惨事、経済基盤の不安定さ、政治の変動で象徴される6年間でありますが、その中でサイエンスの進歩だけは明るいニュースだった気がします。今野新学長をリーダーとした浜松医科大学という教育と研究の場から、日本人の生命を支える人々、さらなるサイエンスの発展に寄与する人々が輩出されることを期待し、また、私自身といたしましても、「浜松光宣言」で謳っておりますように、地域の光産業光医療の発展に少しでもお役にたてればと思います。

執行部役員紹介

監 事

西山 仁

前期に引き続き常勤監事を拝命いたしました。私は地元の静岡銀行を退職後、2年前から浜松医科大学にお世話になっております。着任当初は職場環境の変化に惑うこともありましたが、中村前学長をはじめ教職員の皆様のご支援で、最近では監事として地に足のついた業務を遂行

できるようになりました。

第3期中期目標・中期計画期間においては、大学の強みや特色、社会的役割を踏まえて、教育、研究、社会貢献の機能を最大化できるガバナンス体制を構築し業務運営を行っていかねばなりません。この適正なガバナンス体制を維持するためには監事機能の強化も図ることが求められており、これまで以上に気が引き締まる思いであります。

数か月前、母が附属病院に入院し、患者の家族として医療・看護の現場に接する機会がありました。医療スタッフの適切な医療・看護活動と暖かい励ましの言葉に母は幾度となく元気づけられ、唯々頭の下がる思いでした。まさに医療を通じた社会貢献活動の一端を垣間見ることができました。

私は二期目となりますが、これからも本学が教育・研究・診療を通じて社会に貢献し、さらに高い付加価値を生み出す大学となるよう、監事としての職務を果たしていく所存であります。引き続きましてご指導ご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



副学長(教育改革担当)

宮嶋 裕明

この度、副学長(教育改革担当)を拝命いたしました。

私は本学2期生で、内科学第一講座(消化器・腎臓・神経内科学分野)で神経内科を専攻してきました。担当致します医学教育は、近年怒濤の変革が求められています。日本が直面して

いる時代の変化、生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化がその背景にあります。そういうなかで、これからの時代に通用する力を持った医師・看護師を育てることが本学の喫緊の課題です。文科省からは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革を進めるように指示されています。そのため、学長、理事のご指導のもとで、ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)の見直し、それとリンクしたカリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施の方針)を策定します。そして「卒業時には…ができる」というアウトカムを設定した教育プログラム・評価システムを国際認証基準に沿って構築していきます。更に、新たなアドミッション・ポリシー(入学者受入の方針)に基づいた大学入試改革へと進めていく予定です。

是非とも皆様の知恵とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

監事(非常勤)

村本 淳子



このたび非常勤監事として、仲間入りをさせていただくことになりました。

出身は浜松市ではありますが高等学校まで過ごしたのみで、それ以降、平成10年に三重県立看護大学に異動するまでの約30年弱を東京で暮らし、臨床と看護教育に従事してありまし

た。三重県立看護大学では母性看護学の教授として勤務し、平成19年から学長となり、平成21年からの独法化に伴い、理事長/学長を平成27年3月の任期満了まで行っておりました。その間、平成22年4月から平成28年3月までの6年間、浜松医科大学で経営協議会委員をさせていただきました。浜松医科大学の役割や特徴、また期待されていること、経営状況などについて会議を通して外部からでしたがみせていただきました。

また私が専門としている看護教育の世界は今、他の学問領域では考えられないスピードで大学化し、平成の始め数校であった看護系大学はこの20年の間に、毎年10校程度が新設や学部・学科増設され、異常な数で増え続けています。大学化していくことはすばらしいのですが、このバブル状況は決してどの大学にも、また教員にもいい影響を与えているとはいえません。しかしそのような状況の中にあっても、浜松医科大学は看護学の発展や学生への質の高い教育に力を入れ、医学と看護学が両輪となってすばらしい医療にむけた大学の経営、運営を求められていることを強く感じています。

これから浜松医科大学のお役に立つことができるよう努力したいと思っております。よろしくお願い申し上げます。



副学長(情報・広報担当)

浦野 哲盟

4月から情報・広報担当の副学長を拝命いたしました。医生理学講座の教授を兼任いたします。私は昭和50年入学の本学2期生で、米国等への留学、並びに外科学第二講座所属時の1年間の出向以外は本学でお世話になって

います。今回、母校の運営に携わる機会を与えて頂いたこと、心より感謝申し上げます。

医科大学の使命である教育、研究、診療を円滑に進めるためのインフラを整えること、使命が適切に遂行されているか自己評価するために必要なデータを集積すること、また個人情報を含むそれらのデータを適切に管理することが主な領域となります。同時にデータを随時更新し、最新で正確な情報として学外に発信することも重要な守備範囲です。

図書館では電子ジャーナル購読料の高騰など難しい問題があります。他大学や関連病院とも協調し、これまでの議論を基盤に良い解決策を見出したと思います。最近では多くの学生が図書館を利用しています。サイエンスカフェ等、馴染みやすい雰囲気作りに尽力された針山前館長のご努力の賜物と拝察します。これを引き継ぎ、医学の勉強だけでなく人の心の暖かさに触れたり、あるいは人生の機微を感じたり、また時には深く倫理や生きることの本質を考える本を手にとってもらえる環境を整えたいと夢見ています。

これまであまり馴染みのない領域ですが、重責を全うすべく鋭意努力する所存です。ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

副学長(研究担当)

蓑島 伸生

昨年度までに引き続き本学の副学長(研究担当)を拝命致しました蓑島伸生(みのしましんせい)です。苗字の蓑という漢字は少なくとも3種類(蓑、蓑、箕)あるのですが、私の場合は「くさかんむり」です。複雑な字でご面倒をおかけします。

私は、岐阜県に生まれ、名古屋大学理学部を卒業して、米国アリゾナ大学に留学後、慶応大学医学部分子生物学教室に17年勤め、2003年に本学に採用していただきました。専門は遺伝学とゲノム科学です。

本学は昨年度までの文部科学省国立大学改革加速期間において、大学全体が光医学教育研究拠点として文部科学省に認められ、その一環で研究関連の学内4センター・施設を改組、統合し、平成28年1月1日に光先端医学教育研究センターを設置しました。統合前の4組織は「部」になり、これまで以上にスムーズで有機的な連携が大いに期待されます。新しいセンターをより一層活用いただき、全学を挙げて光医学教育研究拠点としての研究開発成果を創り、高めていくことが、大学改革の波(嵐?)に乗るために肝要なことであるのは間違いありません。ただ、「光医学」はプラットフォームですので、光を活用する「直球」の医学・医療以外にも、光医学のために構築された(つつある)本学の研究環境、人的資源、ノウハウを利用した様々な領域の研究は勿論のこと、本学で行われるあらゆる研究が本学の「顔」であり、重要な成果となることは当然のことです。

第3期は厳しい6年間になりそうですが、本学全構成員が一丸となった研究への邁進をどうぞ宜しくお願い致します。

学長特別補佐(カリキュラム担当)

梅村 和夫

本年4月から、カリキュラム担当学長特別補佐に就任しました。今まで担当させていただいております医学教育推進センターも引き続き担当しますのでよろしくお願いします。

本年4月から、医学科では国際基準に対応するために新カリキュラムへ移行しました。年次をおって新カリキュラムへ移行していきます。旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行時には、ご負担が増えることがあると思いますが、よろしくお願いします。

教育カリキュラムを改善していく上で、カリキュラムの評価は重要となります。まず自己点検をして、本学の教育プログラムの強みと弱いところを解析し、特長を伸ばし改善すべきところは改善することが必要です。また、アウトカム・ベースド教育を取り入れ、そのアウトカムに即した学生評価が必要です。そのためには、PDCA(Plan<計画>、Do<実行>、Check<評価>、Act<評価>)サイクルを回すことで、継続的な改善ができることになります。このサイクルが効率よく回るシステムを構築していきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

副学長(病院担当)

松山 幸弘

この度、平成28年4月1日付けで浜松医科大学附属病院病院長を拝命いたしましたので、皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

浜松へ赴任して6年半、そして副病院長、医療安全管理室長を拝命し2年が経過しました。整形外科の臨床、研究、そして若手医師や学生教育、どれもまだ道半ばの状態で、このたび病院長を拝命することになりました。まさに晴天の霹靂で、大変光栄であると同時に重責に耐えうるかどうかいささか不安な点もあります。

病院にとって最も大切な事は、「安全安心の医療を提供できること」と考えます。我々医療従事者にとってもまた患者さんにとってもより良い環境作りにはこの部門の充実が必須だと考えます。医療安全管理室長を中島芳樹教授に副病院長としてお願いし、さらなる充実を求めていると思います。

また平成29年からは新専門医制度がスタートし、研修システムそのものも大きく変革いたします。この変化に敏感に対応し、またよりよい教育、研修環境の整備には須田隆文副病院長の御尽力をお願いしております。

病院運営には資金確保も重要です。総合的判断が最も大切な部門で、事務部門からの積極的アシストが必要です。この部門には緒方教授に副病院長として牽引していただき、また鈴木美恵子看護部長にも副病院長として地域病院、回復期病院への協力体制構築にも御尽力をお願いしました。

私が今まで生きてきたポリシーは以下の5つに集約されます。「1.困難な症例を進んでおこなうべし:K/2.ことわるべからず:K/3.最後まで最善をつくせ:S/4.感謝の気持ちを忘れるな:K/5.いつも笑顔と笑いを大切に:I」このKKSKIを自問自答しながらベストを尽くすつもりです。どうかよろしく願い申し上げます。

学長特別補佐(国際化促進担当)

福田 敦夫

4月から国際化担当の学長特別補佐を拝命いたしました。これまでは小出前理事が教育と兼務で「国際交流」を担当しておられましたが、今回は「国際化」となっております。国際交流という観点では、慶北医科大学との交流をはじめ、十分な実績があります。その一方で、大学院の

留学生が年々減り、ついに昨年度の入学者は0になりました。海外留学する卒業生も少なく、国際化という点では危機感もあります。特に、最近の学生は世界的に活躍したいという志が低下してきており、先日の入試面接でも、異口同音に静岡県に一生とどまり地域医療に貢献する旨のことしか云いません。個人的には落胆しましたが、アドミッションポリシーまで「世界に羽ばたく」から「おおきく羽ばたく」に変わっていたのです。今後は大学が自ら変わらねば国際化はできないと思います。

減少傾向の大学院生ですが、彼ら無くして大学の研究は成り立ちません。そこで国際化担当として、優秀な大学院留学生を増やす努力をします。まずは、留学生への経済的支援を充実させたいと思います。例えば、留学生会館の入居や生活に必要な最小限の奨学金を、入学申請時に4年間保証するなどです。そうすれば経済的な不安で入学を断念することもなくなると思います。

最後に、私事ではありますが、2017年3月に浦野副学長と共に第94回日本生理学会大会をこの浜松で開催します。世界トップの研究者を多数呼び、本学国際化の起爆剤にしたいと思いますので、御支援・御協力の程宜しくお願い申し上げます。

第3期中期目標 (平成28年度～平成33年度)

建学の理念を踏まえ、重点的に取り組む

- 1 医学及び看護学の進歩に対応する能動的学習能力、問題探求・問題解決能力、そして、幅広い教養に基づく豊かな人間性と確固たる倫理観、国際性を育み、地域社会に貢献できる医師・看護専門職を養成するとともに世界に発信できる研究者の育成を目指す。また、本学の特色でもある光技術等を用いた先進的な医学研究環境のもとで、次世代を担う人材育成として「光医学研究のリーダー」、「光医学の素養を持った医療人」を養成する。
- 2 光技術と他の様々な先進的技術の融合による新しい医療技術の開発推進に取り組む。特に新規光技術の医学への活用(メディカルフォトンクス)と光、電磁波等の多角的な原理を介した生体内の分子や情報の画像化に関して先端的で特色のある研究を推進する。
- 3 地域医療の中核病院として高度で安心・安全な医療を提供するとともに、病病・病診連携を促進し、地域社会のニーズと個々の病院機能に応じた医療ネットワークの構築を目指すことにより、地域医療の充実に貢献する。また、光医学やイメージング等を活用した先駆的な医療を世界に発信するために、臨床教育の充実を図り、研究マインドを有する専門医の育成を推進する。
- 4 産学官連携によるものづくりの実績を活かし、光技術等を活用した特色ある研究を基盤とした実用化開発を推進するとともに、それらの活動を行う人材を育成し、社会に還元してイノベーションの源泉となることを目指す。

先日、大学の構内で8つ葉のクローバーを見つけました。

クローバーには葉っぱの数によって、それぞれ意味があると聞いたことがあります。確かな情報かはわかりませんが、8つ葉は「縁結び」「無期限の発展」という意味があるという記事をみました。

入院や通院されている患者さんやご家族をはじめ、すべての方に「癒し」や「幸せ」が届けられることを願います。

(I.M.)



■ 浜松医科大学建学の理念

第1に優れた臨床医と独創性に富む研究者を養成し、第2に独創的研究並びに新しい医療技術の開発を推進し、第3に患者第一主義の診療を実践して地域医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康と福祉に貢献する。

■ 浜松医科大学の目的及び使命

浜松医科大学は、医学・看護学の教育及び研究の機関として、最新の理論並びに応用を教授研究し、高度の知識・技術及び豊かな人間性と医の倫理を身に付けた優れた臨床医・看護専門職並びに医学研究者・看護学研究者を養成することを目的とし、医学及び看護学の進展に寄与し、地域医学・医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康増進並びに福祉に貢献することを使命とする。